

ヘヤー・インディアンの世界から

原 ひろ子

(お茶の水女子大学)

こんにちは、ただ今の中江さんのお話しにもありましたような日本の現実とか、先ほど沢さんがお話しになった世界のいろいろな子ども達の現状の間を結ぶ目的で、カナダの狩猟採集民、ヘヤー・インディアンについて、私なりにお話することを試みたいと思います。さて、つい最近、ノルウエーのベルゲンで、子どもをめぐる国際会議があったそうです。これは、ノルウエー政府が国をあげて催した行事だったようです。白百合女子大の東洋教授や小林登国立小児病院長などがご出席になりました。その際、米国のフィールズさんとおっしゃる方が、「Japanese children as slaves and consumers」つまり、「奴隷および消費者としての現在の日本の子供」というタイトルで講演をなさり、議論をよんだそうです。一九世紀の「子どもを保護する」という発想で、子どもの生活の基本的なことを考えて法律ができてゆくプロセスとか、先ほどの寺崎さんのお話や、山脇さんのお話を伺っているときに、私は、このフィールズさんのことを思い浮かべていました。

さらに、中江さんのお話しを聞いていて、昭和二八年ごろ、つまり、日本経済の高度成長が始まるころに、私が日本の村々の調査を行ったときのことなども思い浮かべていました。私は、子どもの育て方、ないしは躰に関しての聞き取り調査を行っていました。「旦那衆」ないしは農地改革で土地を手放した方々は、「あなたのお宅ではどういう風な躰をしましたか」と聞きますと、「こういう風な方針だ」とか「こういうことが大事だ」とか「我が家ではこういうことが家訓として残っている」というようなことを、結構張り切ってお話なさる場合が多かったです。特にお父さん方に多かったように思います。男の方々は、「自分の家ではこういう風に育てるんだ」と、はっきりとお話なさいました。女の方々は、実際にはやっていらっしやっても言葉ではあまりお答えにならないので、やっと聞き出したり、現場を観察しながら、いろいろな情報を得たものです。一方、農地改革で土地を得た立場の方々は、「やあ、子どもをどんな風に育てるとか、躰るなんて考えをもったことはない。子どもはそこで育ったんじゃけん」とか、「放っているうちに大きくなっていった」という風な表現をされる場合がずいぶんありました。そうおっしゃっていらしても、そこで一緒に暮らしながら観察していますと、私も私が定義するところの躰というものは存在する、つまり、親御さんたちは躰を確かなにさっていらっしやるということが分かってきました。

私は、日本では、「親だけの力では子どもは育たない」という考え方がかつては根強かったのではないかと思うのですが、これ

が次第に、学校におまかせするとか、幼稚園や保育園におまかせするという方向に変わってきました。そういうことが、まさに今日の問題で、私はこれをヘヤー・インディアンの現実と絡めてお話ししたいと思います。

日本では、子どもの数が減るのと平行して、「子ども」から「お子様」になり、「お子様」は、今や「お客様」になっています。それが、フィールズさんから見ての *Japanese children as slaves and consumers* という現象に連なってくるのかという気がいたします。それと同時に、この比較家族史学会では、これから大阪で高齢化社会における親子というシンポジウムを開かれるようですが、私には八十幾つの母がおりまして、その母から見れば五八歳の私もまだ子どもでして、そういうことも含めてのお話になるかと思えます。

単純に一五歳前、二〇歳前の年齢別の人口ということで考えますと、一九五〇年と一九九〇年の年齢別人口の国際比較によれば、日本の〇歳から一四歳の人口は、一九五〇年に三五・四％だったものが一九九〇年では一八・五％となっています。この統計だけから見ても、この四〇年間の日本における一四歳までの人口の減り方は、欧米に比べると圧倒的に急速なスピードで減っているように見えます。このことは、やはり、今の日本で「お子様」が「お客様」になるという状況と密接に関連しています。それは、子どもの権利条約とは、どう関わってくるのでしょうか。フィールズさんの *Japanese children as slaves and consumers* という

表現が出てくる背景としても考え合わせる必要があります。

これから短い時間でお話ししますヘヤー・インディアンという狩猟採集民の世界は、ある意味では非常に対極的・対照的ではございます。もちろん、このヘヤー・インディアンの狩猟採集生活に私たちが戻ることもできません。けれども、ヘヤー・インディアンの世界についてお話しすることで、人間は非常に柔軟で、様々な適応能力をもっているのだということをいくばくかお伝えできればと思います。そして、そういう人間の多様な可能性の中に、こういう人間存在のあり方もあるのだということをお話しするのが私の役目の一つかという気がいたしております。

まず、図1「編集部注1」といたしました世界地図を見ていただけるでしょうか。アメリカ大陸に×印「×」少年前期の終りを一一歳ごろとする社会を指すが入っておりますが、これは白人や黒人の方々のデータではなくて、先住民、すなわちアメリカ・インディアンといわれている人達のもです。ですからアメリカ合衆国とかカナダとは見ないでいただければよろしいし、南米に關しましても、これは、例えばブラジルという国家が成立する以前の、あるいは、スペイン人などの到来以前からそこに住んでいる先住民の人達についてのデータでございます。

また、イタリーのローマのところを御覧になってください。このローマは、紀元一一〇年ごろの年代の資料に基づいたものです。この地図は、*Ethnology* という雑誌に掲載されたバリイという人類学者による分類をもとに作ったものでして、下の方を見ていた

だければ、その元の文献がたどれるようになっていきます。バリーは、様々なエスノグラフィ（民族誌）をもとに、少年期が何歳くらいで区切られているかを調べています。これは、今まで論じられていたような法律的な意味で子どもとは何であり、大人とは何であるかという発想ではなく、人間の人生を幾つかの時期に区切るとすればそれはどこであるだろうという発想に基づいて区分してごさいます。ここの文章では、斜めにでもちょっとお読みになれば分かるのですけれど、様々な人生の区切り方があり得るということが強調されています。これは、もちろん、狩猟採集生活から農耕生活になればどのように変化するといったような一系的進化論の発想に基づいたものではありません。そういう発想で、子ども時代の区切り方についての変化を単純に論じることとはできないという考えが強く示されています。つまり、非常に多様な対応があるということです。このことを理解しておいていただいたうえで、ヘヤー・インディアンについてお話ししたいと思います。

ヘヤー・インディアンの生活は「原始の時代のものであって、そこから進化してきた」というような歴史観には私は立っていません。そういう歴史観に立たないがゆえに、日本や世界各国の様々な子どもゆく末、社会のゆく末について考える場合でも、私ども人間たちが知恵を絞れば何とかやっつけていけるのではないかというオプティミズム（楽観主義）に立つことができるわけです。図2「編集部注2」の地図を見ていただけますか。これは、ヘヤー・インディアンの居住地についての地図です。私が調査いたし

ましたのは一九六一年から一九六三年のことで、もう三〇年も前になります。ここでは、子どものあり方ということについて、先ほど田中さんがおっしゃったところに触れることだけをお話していこうと思います。

まず、表7「ヘヤー・インディアンの出生率と生存率」「編集部注3」を御覧いただきたいと思います。これは、私がフィールドワークをしたときのデータなのですが、一九五三年から六二年に生まれた子ども達、つまり六三年の時点で〇歳から五歳になっていた人達の生存率は、男女とも八七・五％でした。つまり、五歳までの乳幼児死亡率ということになりますと、一〇〇〇人の中で一二五人が死んでいるというわけです。この当時、カナダ政府はイギリス風の社会福祉政策をすでに導入していましたから、羨ましいようなレベルの医療の状況も見受けられたのですが、それでもまだ実態はこのようなものでした。

ここで私がまず驚きましたことは、彼らにとつての家族のありかたについてでした。例えば、あるテント、あるいは丸木小屋に、大人の男と女がおりまして、そこに子ども達がいるもので、これは家族だろうと思つたわけです。それで、「この家の家族は何人ですか」、「だれとだれがこの家族のですか」という質問をしますと、フン？という顔をされたり、びっくりしたような顔をされるのです。今度はしばらく、そのあたりをうろろろして、あまりものも聞かずにうろろろしながら見ておきますと、この家はこの人とこの人が一昨日暮らしていたと思っていると、昨夜そこ

に寝た人が入れ替わっているのです。物体としてのテントとか、物体としての丸太小屋とかの中で人が入れ替わるわけです。ですから、「あなたの家族は何人ですか」とか「この家にはだれが住んでいるのですか」という質問は成り立ちません。向こうに答えてもらうのに、妥当な質問とすれば、「夕べこの小屋とかテントに寝たのはだれとだれでしたか、では、昨日の前の晩はだれとだれでしたか」ということになります。こういう質問をすると、さっと答えが出てくるのです。もちろん、蓋然性と申しましょうか、確率で計算していくと、ある一对の特定の男と女の対に、特定の組み合わせのAちゃんとBちゃんとCちゃんといった子供達が三六五日のうち一〇〇日くらい一緒にいることはあるようです。それ以外は、クルクル変わっているのです、一年に一回とか、一年に一回行われるような、いわゆる国家のセンサスなどは成り立つわけありません。

ともかく、ジョージ・ピーター・マードックの「家族の定義」の類いの定義はあてはめられないのです。マードックは、セックスとか、生産、消費等の経済活動を礎に、生殖、子どもの世話、老人の世話等を家族の基本的機能だといっています。これは、ある意味で、あからさまに見えている日常のことについていっているわけですね。こうした定義はとりあえず棚上げにしなければなりません。一つ屋根の下にいれば、そこにかまどがあり、だれでも薪を取ってきて割ったり、水を汲んできたりして、だれかが煮たものはだれもが自由に来て食べます。そうして、なくなった

らまただれかが作ります。ゴミはほとんど出ませんから非常にエコロジカルな生活をしているといえます。そういう中で暮らしながら、ではこの人達には家族はないのだろうか、共同生活はあっても家族というものはないのではないかというのが私の中に次々に起こった疑問でございました。

また、ここでは〇歳から五歳くらいのチビちゃん達が大人に依存して暮らしてはいるのですが、四、五歳くらいの子どもの面構えは、なんとなく自信満々な様に見えました。ヘヤー・インディアンの人々は、日本の本州の半分くらいの広い土地の様々な場所に分散してテントで暮らしています。いろいろなところのキャンプに移動しながら生活しているのですが、例えば、三張くらいのテントがあると、常にそこには旅人がいます。移動のときは自分単位で行動しますから、旅人が来ると、四歳くらいの子どもでも、ちょっと頭の働く子どもならば、時には訪れた旅人の犬ぞりやポートに乗って、違うキャンプに行ってしまうのです。各自自分のスリーピングバッグをもっています。ほんのわずかしかな荷物をクルクルとそのスリーピングバッグに巻けば、ひとりでも自分の荷物ができます。着替え二〜三枚と、お皿、フォーク、ナイフ、スプーン、コップくらいしか荷物はありません。特に、自分のお皿とフォークは大切なようです。ハブラシなどもありません。そのあたりで針葉樹の葉っぱをとってきて、シーシーとやれば、もうそれで歯はきれいになります。そういう風になんでも、そのあたりにあるもので用を足すので、ものがないわけ

す。そうしてさっさと行ってしまいます。

それから、ヘヤー・インディアン達は人間に対して、命令したり教え込んだりするのはいくつかだと考えています。これは教育の思想の正反対です。人の自発性を大切にすることは、人間として基本的に大切なことであるから、教えるとか、論ずとか、忠告するとか、ましていわんやカリキュラムを組むなど、とてもいけないこと、怠け者の発想だということになります。こういう社会では、人間が二人して生活する場合、自分にとって心地好くない状況をもう一人の人物が醸し出すというようなことが起こったとき、どんな風に対処すると思われませんか。「あなたちょっと厭かくのはやめてよ」とか、「あっち向いてかいてよ」とか、「煙草を吸ってもいいけど、そんな灰の捨て方ってないよ」とか言えません。人に命令してはいけません。ですからだんだん相手が増えなくなってきて、これ以上何も言えないという状態になると別れる以外はありません。ですからすぐ別れてしまいます。私がこの男と暮らしているとしても、三週間もてばいいほうで、嫌になれば黙ってスリーピングバッグをたたくのであちらに行く。するとまた、なんとなく逢ってみたくなくなるような男があちらにいます、その人が懐かしくなると、抱き合っているとそのうちまた同じようなことが起こります。すると、この間別れたあの男がまた懐しくなる。そういうことをみんなが大体やっています。これが日本の場合ですと、そこに「お子様」がいて、離婚が増えると子どもが権利が問題になります。親権をどちらが取るかということにも

なるわけです。ヘヤー・インディアンの場合はそういうことはおかまいなしで子ども達が遅く育つということが非常に面白いのです。この近代社会で、人口密度の高いところで、そういうところまでをどうやって保証するのかというのは問題だと思います。

ともかく、ヘヤー・インディアンの社会では、そういう風に大人も気が向けば行ってしまいますから、その際に一緒に暮らしている子どもをどうするかというと、まず子どもに聞くのです。朝、嫌だと思えば午後にはもうどこかへ行ってしまうような世界ですから、子どもについては「私はこれからあちらに行くけれども、おまえさんは私についてくるかどうか」と聞きます。子どもがついてくるといえば連れていきます。「いや、ここにいるよ。ここは今、兎もたたくさん取れるし魚もおいしいし、ここにいてよ」と子どもが言えば置いていきます。実際には、自分が連れていきたいと思えば、子どもの心はかなりの程度マネーレイトできる、つまり、影響を与えることはできるのですが、少なくとも言語上の表現では、子どもに意志決定をさせます。この点は、日本の家庭裁判所の離婚裁判などとは大きく違うところです。子どもの本当の気持ちは「僕はここにいたいよ」であっても、裁判官はそういう子どもの発言をなかなか認めてくれないようです。ヘヤー・インディアンの場合でも、たてまえば子どもに言わせるのですが、よく観察しておりますと、自分が連れていきたいと思っていると子どももそう言うという現実はずいぶんございまして。とはいえ、必ず、子どもの口から言わせるので、後で、「あ

なた、あのときどうしたの」と子どもに聞きますと、「それは僕が行きたいと言ったから行ったんだ」とか「僕がしたくないから、あのときしなかったんだ」と、すべて、僕が、私がというような形で私のインタビューに答えてきます。つまり、何かに影響されているという気持ちのほうは抑圧して、僕がやっているんだ、僕がやっているんだということで、その辛さもヘヤー・インディアンの方はお持ちなのだと思えます。その辛さを緩和する術は、守護霊という魂の世界の問題と深く関わりあっています。そのお話しは、ここでは省きますが、三〜四歳の子どもの頃から魂の問題と真剣に向き合っているヘヤー・インディアンと、Japanese children as slaves and consumers という問題が出てくる日本とは非常に違ってくるだけ申し上げておきます。少なくとも、一九六〇年代のヘヤー・インディアンの子ども達は、大変幼いきから魂の問題をしつかり体験していたからこそ、面構えもしつかりしていたのかなあとという気がします。それほど自信に満ちた風貌で彼らは生きていたのです。

それと同時に、ここは非常に食料がまばらで、そこに生きているムースとかテンなどの動物の分布密度が低いものですから、人間は食べ物を漁って動きまわらなければなりません。人間の側のそのための方力というのは大変なものです。狩猟採集民の中でも、ブッシュマンとか、比較的暖かいところに住んでいるガシーのように、飢え死にしたり凍死したりする危険のない方たちは、わずかなエネルギーを使って、後は優雅にものを考えて生きていかれ

る人生を送っていらっしやるようです。もちろん、今や、いろいろな民族紛争の中でエネルギーをかけなければならなくなりましたからその方たちも大変ではありませんけれど、ヘヤー・インディアンの場合、やはり消費するエネルギー量は圧倒的に多いのです。それで、分散して生活しなければならぬわけです。男と女の対もバラバラだし、子ども達もバラバラですけれども、一組の男と女の対が生産できるエネルギー量、燃料、食糧には限りがあります。八人の子どもを二人の大人が養うことなどはとうてい無理です。五歳でも三歳でも、できるだけの生業に関わる仕事の手伝いはしますが、せめて一二歳くらいにならないと自分一人で食べられるようにはなりません。一二歳でそうなったとすれば、それは天才的なハンターとでもいうべきで、まれな例だと考えてよいでしょう。一五歳にもなれば、普通に自分で食べているようになります。そのようにならなくて、子どもが三人四人と増えて参りますと、もう食べさせたいいけなくなってしまう。そういうときどうするかというと、例えば、自分が妊娠していただきます。おなかが大きくなり始めていて、生まれたての赤ん坊を育ててみたいという欲望もあった場合には、少し大きくなった子達が自分から離れていくようにさせるのです。年上の子どもに、なんとなく最近、一緒に暮らしている大人達が自分をうとんじているようだと思わせるのです。そうすると、この子は、さて、どこへ行つて暮らそうかと真剣に考え始めます。このおぼさんのところについて暮らそうか、などと考えているうちに次第に自分の親の元に戻る頻度が減って、

最終的にはあちらに行ってくれるわけです。あるいは、おなかは大きくなり始めたけれど、どうもグニャグニャの赤ちゃんはめんどうくさいなあと思った場合、こういう場合はだれかその赤ちゃんを欲しいと思う人はいないかと探します。日本の母親学級とか、産婦人科の先生とか、発達心理学の先生とかはお怒りになるかもしれませんが、実際、七、八歳の子どもの方が役には立つのですから、こちらの方がいいと思う場合もあるわけです。水も汲んでくれるし、時には兎も取ってきてくれて、便利で、この子の方がいいなと思ったときには、あまりおおっぴらにはせずに、ロコミでだれかこの赤ちゃん欲しい人はいないかということ伝えます。そうすると、生まれたての赤ちゃんをいじくってみたいと思っているような人が現れてきます。男でも女でも、皆しょっちゅう移動していますから、生まれるときにその人の側にいなければいけないので、なるべくそうした候補者のキャンプの方にいるようになります。そして、そこで産み落して預けてしまうのです。驚いたことに、ヘヤー・インディアンの人達は五〇歳になっても、六〇歳でも、いとも軽々と億劫がらずに新生児の世話をします。日本では、五〇歳ならば初孫の世話をするのもファイトがあるけれど、六〇歳で孫の世話をするのは大変だと考えられています。ヘヤー・インディアンではそんなことはありません。男も女も、そういう意味での柔軟性がございまして、また、この当時では、かなりタフな人しか生き残っていなくて皆さん非常にタフだったので

このような社会を見ておきますと、マードックや、その他、私たちが文化人類学や社会学で習ったところの「家族」というものはいらぬのではないかと思ってしまうのですが、ヘヤー・インディアンには必ずどの人にもお母さんとお父さんが存在しています。「あなたのお父さんはだれですか」とか、「お母さんはだれですか」と尋ねると、「誰々だ」と答えるのです。「あなたの子どもはだれですか」と尋ねても、「だれとだれとだれとだれとだれ」という風に答えます。どの人にも両親がいるのです。日本ですと、戸籍に入らなかつた場合には庶子などと称して区別されますが、そういうことはありません。母親はおなかから出てきますからこれが母親ですが、父親がいろいろな複雑な状況の中で決められていくというのが不思議です。人によっていろいろ癖がありまして、一回につき一人という女、一度に何人もという女など、いろいろいます。中には三〜四か月の間は必ずワンペアーという人もいますし、二〇歳の頃から七〇歳近くになるのにずっとワンペアーでいたというカップルも一組だけですけどもありません。こういうカップルについては、カトリック教会は大変立派だとお褒めになるけれど、この人達にとっては趣味の問題でしかありません。父親がだれであるかを決める場合、「この人妊娠九か月ということは逆算するとあのとき一緒だったのはだれだ」という風に皆さん大体ご存じですから、しばらく同じ男と過ごしていた人はだませません。多くの男と過ごしていたときには、あの残留孤児問題のように血液検査をするわけではありませんから、賢い人

の場合には世論を操作するわけです。この中で恋人としていいのはこの人、狩猟が上手だからこの人と付き合っていると肉などをもつてきてくれるし、毛皮をなめす当番になることも多いから毛皮にも不自由しないし、等々いろいろありまして、それぞれの長所・短所を判断して、この子の父親にはだれになってもらおうかと考えます。そして、この人がこの子のお父さんだと、当人にも思っていたとき、世間にもそう思っていたら、あの有吉佐和子の「悪女について」ではありませんがそういう世論操作をすればいいのです。けれども、これは破綻することもあります。ヘヤー・インディアンの間では、自分が妊娠するときにはお告げがあつて分かるものだと信じられています。といつても、それはなるべく口に出さないほうがいいと言われています。そのほうが都合がいいからなのですが、それでも、つい喋ってしまう人がいます。そうすると、どうも話が矛盾しているんじゃないか、ということになって、だれもが本当かなあと思っていますから、簡単にばれてしまうのです。そういうとき、もう一度お話を作り直さなければならぬのですけれど、作り直しをしているうちに、次から次へと新しい事件が起こつて、皆さん忙しく、今日を生きている人達ですから、昔ついた嘘もだんだん分からなくなつてしまします。そういう風にして、ともかく必ず父親を作る、というのはとても不思議です。

いろいろ聞いているうちに、このことは、結局インセスト・タブーと深く関わりあつていることが分かりました。彼らの中で、

インセスト・タブーは大変重大視されています。ここでは、自分が死んだときに自分の遺体を埋めてくれる人は一定のキンシップの外の人でなければならぬという考え方が基本になっています。自分の遺体を埋めてくれるのは四人の男なのですが、この四人と、自分の身内とはアボイダンス・リレイションシップ（相互に忌避しあう関係）に入るのである。身内とはすなわち、両親とされる人達、その両親を共有する兄弟姉妹、両親ではなく片親を共有する兄弟姉妹、自分の生んだ子ども、ないし、男の人の場合は自分の子どもとされる子ども、そして自分がセックスした相手です。このアボイダンス・リレイションシップは、一生継続します。自分が死んだあと、身内が生きている間、そして四人の男が生きている間続きます。たかだか三五〇人、いくら増えても五〇〇人や六〇〇人の狩猟採集生活で、人が絶えず動いているという状況の中では、このアボイダンス・リレイションシップは結構大変な問題となります。たとえ主体性を重んじるといっても、人が一人で生きていかなれないのはヘヤー・インディアンも同じです。一人では生きていかなれないから、どこかでだれかと共にキャンプをしなければならぬ、そのときに、「ああ、あそこにテントがあるぞ」と行つてみたら、そこにアボイダンス・リレイションシップの間柄の相手がいた場合、まず後ろを向くことなのです。後ろを向いて、なるべく離れたところでテントを張らなければならぬ。これは、死をめぐる非日常的なことでありながら、すぐれて日常的な現実となつて展開されるべきことです。そういう中で、亡くなった身

内、その遺体という恐ろしいものを埋めて下さった、有り難い、畏れ多い方々との関係が、生きている間ずっと、常に持続されていくのです。そういう意味において、家族、といいましうか、身内は大切ですから、ここにはマードックの定義にはあてはまらない家族の重要性が存在するといつてよいと思います。

このように考えて参りますと、マードックのいつているごとき「家族」というものは、たかが浮き世のことにすぎないではないかという気がいたします。こういう中で、子ども達は、自分の判断で生き、教えてもらおうというのではなく、周囲の人達のしていることを盗んで自ら覚えるという生き方をしていました。ただし、最近では、近代国家カナダの中で「なりわい」を見付けなければならなくなってきましたので、やはり、学校教育というものも必要になって、高卒のヘヤー・インディアンもずいぶん存在しています。そして町の中へと散らばっていつているようです。

最後に一つのエピソードをお話してしめくりにしたいと思います。私が調査しておりましたときのことですから、三〇年くらい前になりますが、ある日のこと、白人の警官がキャンプにやってきました、子ども達が九月から学校に通うように親にサインをさせようとしていました。この警官は、カナダ国民には、教育を受ける義務、および権利、親には教育をする権利、子どもが教育を受ける権利を守る義務があるといつてサインをさせようとした。親たちは、子どもを探しまわるのですが、いわゆるカナダ政府の示してくる子どもが、今、自分と一緒に同じキャンプにいるとは

限りません。そこで、その子を探して、その子に会って、その子が学校に行くと言うかどうかを確かめるまでは私はサインできないと言つて警官を待たせるのです。警官の方も、サインを集められなかった場合は業務に忠実でなかったということで、ペナルティーを科されますから、一か月も二か月もかけてサインを集めようと、一所懸命さがしたり、待ったりします。七月の初めごろ、一応子どもが見付かつて、その子が「行くよ」と言うので親はサインをします。いよいよ九月というとき、八月の三一日頃にはお迎えのオシターという飛行機がやってきます。ところが、そのときちょっと「どこかでムースが取れたぞ」というようなことがあると、皆、狩猟採集の血がたぎりまして、もう学校に行くのは馬鹿馬鹿しくなってしまうのです。そうして、カナダ政府が大金をかけてお迎えにきた三〇人乗りの飛行機に、たった三人ばかりの子ども達が乗って寄宿舎へ向かう、というようなことがございました。日本でも、ヨーロッパでも、学校が始まるというときにはいろいろ親の都合もあったようですが、ヘヤー・インディアンの場合は、子どもの気持ちゆえにそういう風になっていったといえると思います。といひましても、これも非常に短い過渡期の間のことで、次第に、字が読めたり、タイプが打てたり、英語が喋れたり、フランス語が喋れるということがどうも大切なようだという認識が広まり、今ではずいぶん変わってきたようですが。

子どもの権利条約を考えると、条文などをおさらいで読むとき、その行間にヘヤー・インディアンの子ども達の姿がチラチラ

見えるという今日この頃です。

編集部注

発表の中で言及されている図表については紙幅の都合で割愛させていただき、ここに図表の出典を示すにとどめました。デイスカッション中に言及されている図表についても同様にいたします。

〔1〕原ひろ子『原初社会』における子ども観」『岩波講座 子ども達の発達と教育2』（岩波書店 一九七九）二二六～二二七頁。

〔2〕原ひろ子『ヘヤー・インディアンとその世界』（平凡社 一九八九）三三三頁。

〔3〕同、二五三頁。